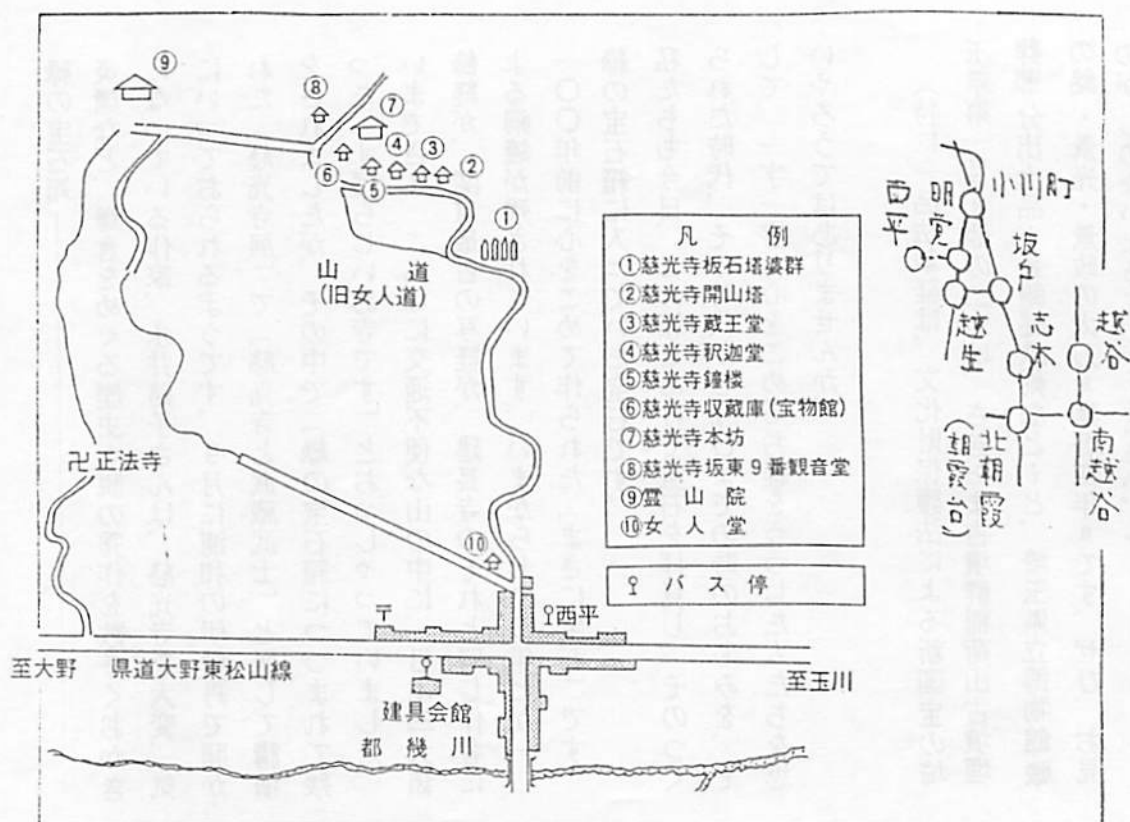


昭和六二年十一月二十九日（日）郷土研究会資料

第一五七回 史跡めぐり資料

緑の寶石箱 「慈光寺」に埼玉の国宝第一号をみる

越谷市郷土研究会



大第一五七回史跡めぐり案内

緑の宝石箱 「慈光寺」に埼玉の国宝第一号をみる

とき 昭和六十二年十一月二十九日(日)

集合 南越谷駅前 午前八時二〇分集合

八時四四分発

コース 南越谷駅ー(武蔵野線)ー北朝霞駅ー朝霞台駅

ー(東上線)ー志木駅(特急乗替)ー坂戸駅ー

(越生線)ー越生駅ー(八高線)ー明覚駅ー(村

宮バス)ー西平ー(徒歩三〇分)ー板碑群ー慈

光寺ー国宝・一品法華経、鎌倉建長寺と同じ作

者による銅鐘等拝観ー昼食ー靈山院ー永仁板石

塔婆、鉄道阿弥陀仏拝観ー(徒歩三〇分)ー

ー帰路は往路と同じコースー南越谷駅前解散

会費 三〇〇円(交通費、入館料、資料代含む)

案内者 理事 宮川 進

緑の宝石箱

炎環など、鎌倉をめぐる歴史小説の秀作を数多くおかきになつておられる作家、永井路子さんは、慈光寺を大変、気に入つておられるようです。9月に浦和の伊勢丹で開かれた「慈光寺展」で「慈光寺と武蔵武士」と題して講演をされましたが、その中で「緑の宝石箱につつまれて残つた、すばらしいお寺です」とおっしゃつていました。いまでさえ、こんなに交通不便な山の中に、日本三大装飾経が、関東最古の写経が、建長寺のそれと同じ作者による銅鐘が残されています。いまから七〇〇年とか一、一〇〇年前に心をこめて作られた「まさに宝石」です。緑の宝石箱に入つていた宝石です。

私たちも今日、この箱をあけて宝石を拝見し、そのつくられた時代、その時代から今日までの時のおもみを、そして、一字一字、心をこめてお経をうつした人たちを思いやろうではありませんか。

(特に一品法華経は、文化財保護法による新国宝の埼玉県第一号。他の二つは、さきたま古墳群稲荷山古墳埋葬部分出土品と金錯銘鉄剣などと、埼玉県立博物館蔵の銘：景光・景政の太刀。嘉暦四年。ぜひ、お見のがしのないようにつけてください。)

この緑の宝石箱、慈光寺をめぐる四つの謎として次のようなものがあります。

○なぜ、平安初期に、この山の中に大寺院が立てられたのでしょうか。

○なぜ、源頼朝は、この慈光寺に深く帰依したのでしようか。

○なぜ、この慈光寺に国内でも珍しい古いお経があるのでしょうか。

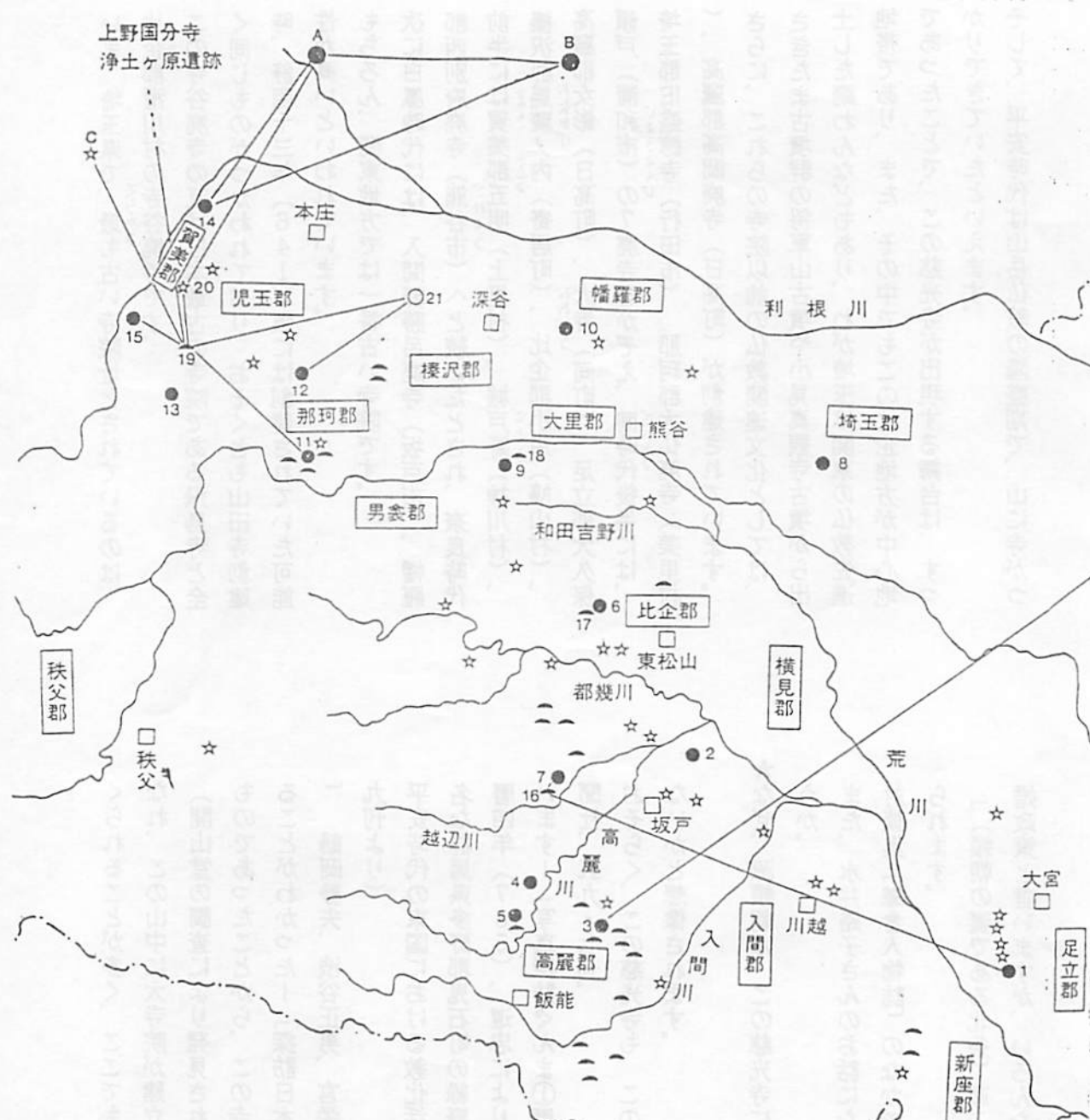
○物部重光鑄の銅鐘は頼朝寄進の鐘なのでしょうか。

これらの謎について、すこし、考えてみたいと思います。

大なせ、平安初期に、この山の中に大寺院が建てられたのでしょうか。

この慈光寺は、かつて清和天皇(858~875)から「天台別院一乘法華院」の勅額を賜つており、鐘は鎌倉の五山の第一である建長寺のと同じ名工、物部重光のものを、装飾経は厳島神社の平家納経とならび称されるものをもっている由緒のある大寺院です。

それが、この比企の山中に、どうして建てられたのでしょうか。



- | | | |
|-----------|-----------|------------|
| 1 大久保領家廃寺 | 9 諺光寺廃寺 | 17 平谷窯跡 |
| 2 勝呂廃寺 | 10 西別府廃寺 | 18 荷鞍ヶ谷戸窯跡 |
| 3 女影廃寺 | 11 馬騎の内廃寺 | 19 金草窯跡 |
| 4 大寺廃寺 | 12 大仏廃寺 | 20 岡遺跡 |
| 5 高岡廃寺 | 13 寺山廃寺 | 21 豊樹原遺跡 |
| 6 寺谷廃寺 | 14 五明廃寺 | A 上植木廃寺 |
| 7 小用廃寺 | 15 城戸野廃寺 | B 寺井廃寺 |
| 8 旧盛徳寺 | 16 西戸丸山窯跡 | C 山王久保遺跡 |

● 国分寺

※ 線は同范関係を示す。

第 106 図 古代寺院跡分布図

いま、埼玉県で、最も古い寺院址とされているのは、比企郡滑川村の寺谷廃寺です。

この寺谷廃寺の瓦は日本最古の寺院である飛鳥寺と全く同じものがつかわれており、おそらく山田寺創建時、舒明十三年（641）頃には創建されていた可能性が高いといわれています。

もちろん、関東地方では一番古い寺院です。

次に白鳳時代には、入間郡勝呂廃寺（坂戸市）、幡羅郡西別府廃寺（熊谷市）へと続いたとされ、奈良時代前半には賀美郡五明（上里村）、城戸野（神川村）、榛沢郡馬騎ノ内（寄居町）、比企郡小用（鳩山村）、高麗郡女影（日高町）、大寺（同町）、足立郡大久保領戸（浦和市）の7廃寺をかぞえ、同時代後半には、埼玉郡旧盛徳寺（行田市）、那珂郡大仏廃寺（美里村）、高麗郡高岡廃寺（日高町）が創建されています。

さらに、これらの寺院以前の仏教関連文化としては、さきたま古墳群の將軍山古墳や小見真観寺古墳から出土した銅わんなどもあり、わが埼玉は関東の仏教先進地帯であり、また、その中でもこの比企地方が中心地であったことで、この慈光寺が出現する舞台は、すっかりできていたといえます。

そして、平安時代は山岳仏教の隆盛期で、山に寺がつ

くられることが多く、ここでも、いままでの平地をばなれ、この山中に大寺院が建立されたと思われれます。

（開山堂の調査により発見された蔵骨器が平安初期のものであったことから、この寺の創立は平安初期であることがわかった。「探訪日本の古寺、関東・甲信越」 鶴岡静夫、渋谷正男、宮菜二著、小学館、五六・九刊より）

平安時代の東国における教化活動の中心道場として著名な群馬県多野郡鬼石町の緑野寺は寺伝によれば、延暦四年（785）、道忠により開山されたといわれています。「写真探訪ぐんま①歴史の散歩道」、上毛新聞社、五九・七刊。

おそらく、この慈光寺も、このころ創建されたのではないかと想像されます。

★なぜ、源頼朝は、この慈光寺に深く帰依したのでしようか。

また、永井路子さんのお話になりますが、永井さんは対談集「鎌倉人物誌」のなかで、次のように言っておられます。

「（頼朝の妻である北条）政子の妹たちを北条氏は結婚政策と言いますか、いろんなところへお嫁にやりま

す。畠山重忠のところへ一人、稻毛重成に一人、要するに武蔵の秩父系統へ売込んでゐるわけです」

そして、頼朝の乳母である比企の尼の出身も、この地方に住む比企一族です。

このように頼朝も政子も、さまざま「縁とおもわく」から武蔵武士を大切にし、その精神的基盤（永井さんのことば）を大切にしたのです。

これが、慈光寺が頼朝の深い帰依をうけた背景ではないでしょうか。

★なぜ、この慈光寺に国内でも珍しい古いお経があるのでしょうか。

小水麻呂経の方は上野地方の有力豪族層の一人であったとみなされる安部小水麻呂が平安初期（貞観十三年871、清和天皇の時代）につくらせた写経ですし、一品法華経の方は平安時代末に後鳥羽天皇、中宮宣秋門院任子をはじめ、関白太政大臣藤原兼実の一門により書写奉納されたものです。

いずれも、この慈光寺とは直接関係はありません。

それが、この比企の山の中に、こうして存在する…一体だれがここへもってきたのか、大きな謎です。

そして、それについては、いま、次のような解釈がなされています。（一品法華経についての解釈です。）

1 鎌倉時代初期の慈光寺は源頼朝、政子、比企能員

、畠山重忠等の有力武士の信仰があつく、一山七五坊をもつて全盛をきわめ、さらに後鳥羽天皇から勅号を賜わった栄朝禪師が存在するなどあつて政争の渦中の京都をさけ、慈光寺に奉納されたらしい。（「都幾川村の史跡と文化財」 都幾川村教委 五八・九刊）

2

平安時代から天台別院として栄えた慈光寺の由緒により比叡山からもたらされたものか、あるいは深く、慈光寺を信仰した源頼朝の力によるものといわれている。（「埼玉の仏教文化」 埼玉県立文書館 五九・十刊）

藤原（九条）兼実と頼朝とのかかわりあいを示すものに一つは藤原氏の氏寺である興福寺の再建の問題があります。平氏が治承四年（1180）、東大寺、興福寺を焼いたとき、兼実は「悲哀、父母を失ふよりも甚し」と嘆いています。そして、この復興のもつとも有力な後援者が、鎌倉幕府の最高責任者・頼朝だったのです。

こういう縁から、この一品経を手に入れた頼朝が慈光寺へ奉納したのかもしれない。

また源氏が三代で絶えたとき、摂関家から九条頼

経が迎えられたのも、九条家と鎌倉とのつながり
をしめしているのではないのでしょうか。

★物部重光鑄の銅鐘は、頼朝寄進の鐘なのでしょうか。

新編武蔵風土記稿は「東鑑の文治五年（1189）六
月二十九日の条に、去る治承三年（1179）三月二日
、伊豆の国より藤九郎盛長（安達氏）をお使いとして
洪鐘を鑄せしめ、ご署名を件の鐘の面に刻まれ、慈光
山に納められし由、載せられたれば、この鐘もしくは改鑄
になるにや、されども寛元三年（1245）は治承三
年を去ること、わずかに六六年なれば、自ら別に造り
し鐘なるも知るべからず」と記しています。

伝説によれば、頼朝寄進の鐘は、ある年の地震に山を
ころげおち、山の下に淵に沈んでしまったが、安部小
水麻呂の奉納した大般若経を誦すると、この経の声
に和して、淵の底から今でも鐘の音が、かすかにひび
いてくるといえます。

鑄物師の鐘にこめた愛情が小水麻呂経の功德によつて
よみがえるのでしょうか。

（「ふるさとの寺」 秋山喜久男、敏蔭英三著 埼玉
県郷土資料刊行会 四六・二刊）

一 都幾山慈光寺の概要



釈迦堂



釈迦堂本尊 木造釈迦如来坐像

寺伝「都幾山慈光寺実録」によれば、天武天皇の白鳳三年癸酉（六七三）僧慈訓当山に登り慈光老翁の付嘱を受け、千手観音堂を建て観音霊場としたと伝えられている。又白鳳九年役小角伊豆国に配流となり、東国を歴遊して当山に至り西藏坊を設け修験の道場とした。

慈光寺を創建したのは釈道忠である。唐国より来朝し東大寺戒壇院を開設した鑑真和尚の高弟釈道忠は、教えを広めるため東国を巡歴し、徳望あつく利生に努めたので民衆より広惠菩薩と敬称された。当山に仏堂を建立、一丈六尺の釈迦如来像を安置し、一山学生修学の大講堂とした。従来より役小角を根本開山、釈道忠を開山と称している。

その後、桓武天皇延暦二年（七八三）最澄（伝教大師）は釈道忠の付嘱を受け当山に天台密教の教旨を弘通することとなった。以後当山は

台密の教法を修学する学徒と役小角の流れをくむ行徒の二派が修業する女人禁制の道場として、また千手観音霊場として繁栄を極めた。

特に清和天皇の勅願により当寺を「天台別院一乘法華院」と定められ勅額を賜った。そのころ、貞観一三年（八七一）上野国権大目安部小水麻呂は大般若經六百巻を書写し奉納した。関東地方最古の写經として重要文化財に指定されている。

鎌倉時代初期、後鳥羽天皇をはじめ関白藤原兼実の一門、廟堂の廷臣等による法華經など三十二巻を書写して奉納された一品經は、日本三大納經（三大裝飾經）の一つに数えられ国宝に指定されている。

源平両氏の相克は当寺の将来を大きく左右するところとなった。源頼朝は伊豆国配流時代より当寺に崇敬の念あつく、鎌倉に幕府を開くに至りさらに深めた。その証跡を吾妻鏡に見ることができぬ。

治承三年（一一七九）家臣安達盛長に命じ洪鐘を奉納し、文治五年（一一八九）頼朝は命運をかけて奥州藤原泰衡追討の兵を起すにあたり、日米礼敬の愛染明王像を慈光寺に送り本尊として戦勝の祈禱を別当嚴羅一山衆徒に依頼し、凱旋に際して供米と長絹を献じた。又一山諸堂諸坊の修理營繕をし田畑千二百町歩を寄進したと伝えられている。

宋国より臨濟禪を伝えた榮西禪師の高弟榮朝は、当寺に住し塔頭靈山院を創建し禪の道場とした。ここに台密禪修業の天台宗の関東別院としての偉容を整えるに至った。榮朝は後に上野国世良田の長楽寺に移り禪風を挙揚していたが、当寺のために願主となり寛元三年（一二四五）銅鐘を鑄造し納めた。寛元の梵鐘といわれ重要文化財に指定され現存している。

鎌倉幕府は三代にして源氏は絶え、北条氏に実権が移り、最大の外護者を失った当寺は、次第に衰退にむかい室町時代の厳しい試練を受けることとなった。

天正十八年（一五九〇）徳川家康は江戸城に入り、源氏崇敬の縁故

により寺領百石が与えられ、江戸幕府の時代になり更に保護が加えられた。三代將軍家光の室桂昌院は特に信仰あつく、奉納された貴重な品々を今に見ることができぬ。

創建より千三百有余年の当寺には、前記のほか重要文化財の多宝塔、金銅密教法具、県指定文化財として板石塔婆群・文殊菩薩坐像・螺鈿經箱、開山塔出土の壺、県指定天然記念物の多羅葉樹等長い歴史を物語る宝物が多く所蔵されている。又千手観音堂は坂東九番の札所として全国から巡拝者が多く、法灯連綿と続く関東の靈山として栄えている。

二 慈光坂の板石塔婆群

埼玉県指定文化財







慈光坂の板石塔婆



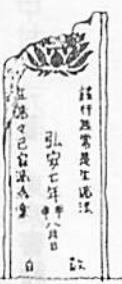


西平の宿から慈光寺へ登る参道を慈光坂しこうざかという。その中間地点の右側に西方に向かつて群立する板石塔婆は、鎌倉時代の特色をもつ雄大な石造美術品として埼玉県指定文化財となっている。高さは、一三八センチメートルから大きなものでは二七五センチメートルをはかり、いずれも完全に近い形で保存されている。

造立年代は、弘安七年（一二八四）を始めとし、徳治、元亨、嘉暦と鎌倉時代のものも多く、室町時代に入って文和四年（一三五五）の六十六部塔婆は全国で唯一のもので








あり、また金石誌史によれば康永四年（一三四五）の十三仏塔婆は国内最古のものといわれている。



この板石塔婆は、慈光寺全盛期当時の歴代住職の供養として建てられたと推定されているが、鎌倉時代は一由に七十五坊を有し関東天台別院として栄えた往時をしのぼせると同時に、その堂々たる雄姿が歴史のおもみを伝えてくれる。

高	幅	厚	高	幅	厚	高	幅	厚	高	幅	厚
256cm	64cm	10cm	253cm	65cm	10cm	226cm	56cm	9cm	216cm	68cm	7.5cm
											
和暦 元享4年	西暦 1324年		和暦 元享4年	西暦 1324年		和暦 徳治2年	西暦 1307年		和暦 寛正5年	西暦 1464年	
現在地 慈光寺三門址 下段右より第4基目			現在地 慈光寺三門址 下段右より第3基目			現在地 慈光寺三門址 下段右より第2基目			現在地 慈光寺三門址 下段右端第1基目		

高	幅	厚	高	幅	厚	高	幅	厚	高	幅	厚	高	幅	厚
143cm	40cm	5.5cm	138cm	39cm	5.5cm	120cm	43cm	4.5cm	138cm	40cm	4cm	275cm	64cm	7cm
														
和暦 嘉暦2年	西暦 1327年		和暦 文和4年	西暦 1355年		和暦 弘安7年	西暦 1284年		和暦 康永4年	西暦 1345年		和暦 貞治4年	西暦 1365年	
現在地 慈光寺三門址 上段左端			現在地 慈光寺三門址 右より第3基目			現在地 慈光寺三門址 上段右より第3基目			現在地 慈光寺三門址 上段右端第1基目			現在地 慈光寺三門址 左端		

（都幾川村板碑集録より引用）

<p>1 胎大</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>2 阿1</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>3 阿1</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>4 阿1</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>5 阿1</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>6 十三</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>7 阿1</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 
--	---	--	--	--	--	---

<p>8 阿3</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 	<p>9 阿1</p> <p>諸行無常是生滅法 逆 甲 敬</p> <p>法印血印 眞正五年二月時正 修 申 白</p> <p>生滅々已寂滅為樂</p> 
--	---

六十六部一

また六部ともいい、一種の巡礼。書写した法華經を一部ずつ、六十六か所の靈場に納めながら諸国をめぐる行脚僧（仏教語大辞典 中村 元著 東京書籍 昭56年刊）

昭和六〇年十一月二六日の慈光寺大災厄

釈迦堂、蔵王堂および鐘樓が放火によって無残にも焼失してしまいました。

そして、関東最大級の釈迦堂、像高2・26メートルの巨大な釈迦坐像に蔵王像としては関東随一といわれた2・1メートルの蔵王権現（平安後期作）等が一挙に烏有に帰してしまつたのです。

<板碑にみられる諸信仰> 板碑に多い信仰は、阿弥陀如来を供養して浄土往生を祈願した例で、阿弥陀信仰の広がりをよく示している。阿弥陀如来が観音・勢至両菩薩を脇侍として従えた阿弥陀三尊、あるいは一尊を梵字で表現したものが多い。大日・釈迦・薬師如来への信仰、日蓮宗の題目をあらわしたのもつくられる。十三仏、二十一仏、庚申待板碑は、室町時代に特徴的なものである。とくに庚申待板碑は、庚申供養(→P. 348)との



阿弥陀三尊板碑 (埼玉県)



阿弥陀三尊来迎板碑(東京都)



六字名号板碑 (埼玉県)



大日三尊板碑 (埼玉県)



釈迦三尊板碑 (大分県)



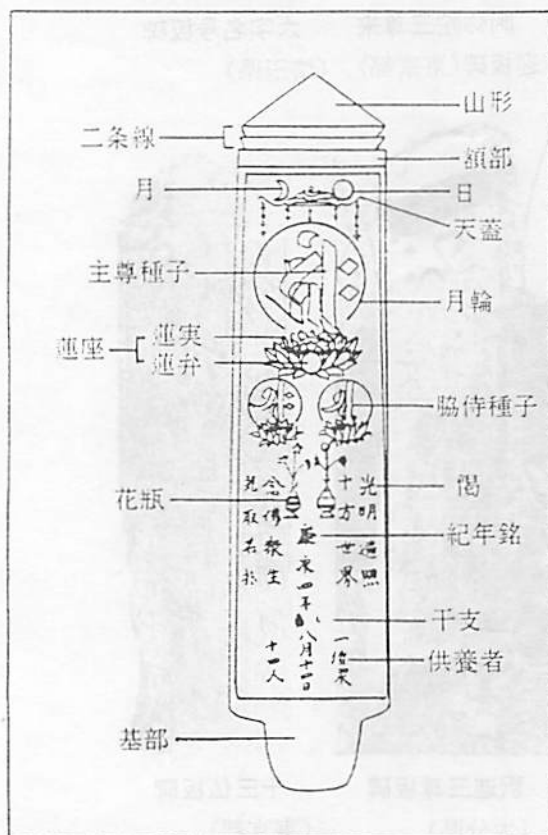
十三仏板碑 (東京都)

習合によって地方武士・庶民が造立し、近世の庚申塔との関連をうかがわせている。

＜板碑（板石塔婆）＞ 鎌倉時代におこり、室町時代には形式化しながらも量的には増加をみ、ほぼ中世にかぎって造立された特色ある石塔に板碑（板石塔婆）がある。板状の石を用い卒塔婆の一種として発生した供養塔であるが、副次的には墓石の意味をもつようになっていく。五輪塔が簡略化したもの、山伏のもつ碑伝の系統をうけたものと、その成立に二つの見方がある。浄土教、密教、禅、日蓮宗関係のものと内容はさまざまであるが、簡単な形であることから従来の石塔にくらべて一般の武士層でも造立されるようになり、鎌倉新仏教の興隆ともかかわる点もうかがえる。

用材としては、各地域に産出する石材が用いられた。大分・東北地方では凝灰岩、四国・関東では緑泥片岩を多用している。とくに埼玉を中心とする関東各県での盛行はめざましく、中世の石造物、仏教信仰の内容、豪族や武士の展開、河川交通のあり方などをさぐるうえで重要な役割を果たしている。

板碑を構成する基本は、山形の頂部、二段の切込み（二条線）、やや突出気味の額部、それ以下の身部、地下にさした基部からなる。身部には仏像をあらわす梵字（種子）があり、造立年月（日）の紀年銘が彫られるのが一般的。梵字（種子）を刻まずに、図像として線刻された仏や、名号・題目などを文字であらわす場合もある。経文の一部を記した偈は、信仰の背景をより明らかにする。



板碑の各部名称

<梵字と種子> 板碑をはじめほとんどの石塔に、仏教上の権威ある象徴として梵字が刻まれている。梵字は梵語を表記するために用いられた古代インドの文字であるが、中国・日本では梵字のもつ呪術的威力が強調されて、あらゆる仏教遺物に氾濫するまでになった。中国では、悉曇(成就吉祥)ともいわれた。板碑などでは、梵字1字をあてて一定の仏菩薩をあらわす。この場合、その1字が限りない仏の恩恵をうけるものとみる密教観から種子とよんでいる。すべて功德が生ずることを草木の種子にたとえていったわけで、石塔を知るうえで、梵字の概要を通観しておくくと便利である。

おもな梵字

種子	読み	主尊
ॐ	バク	釈迦
ॐ	アーンク	(胎藏界) 大日
ॐ	バーンク	(金剛界) 大日
ॐ	バイキリーク	薬師 阿弥陀
ॐ	サク	観音
ॐ	マン	普賢
ॐ	カ	地藏
ॐ	カーンユ	不動 弥勒

キリークの成立

द ॐ ङ ः ⇨ ॐ
 カ ラ イー ク キリーク

(貪 瞋 痴) 涅槃点 ⇨ (三毒) が寂滅する

ॐ ॐ ॐ ॐ
 ॐ ॐ ॐ ॐ
 ॐ ॐ ॐ ॐ

(オン) (アホキヤ) (ベイロ
 シヤ) ナウ (マカ) ボテラ
 (マニ) (ハンドマ) (ジンバラ)
 (ハラ) バリタヤ (ウン) 休止符

(掃命) (不空) (光明
 遍照) (大印相)
 (摩尼宝珠) (蓮華) (焰光)
 (転) (大誓願)

(意 訳)

↑
 光明真言……密教で日常となえる聖句で、大日如来への祈願をあらわしている。これをとなえれば、罪障消滅し福楽長寿を得、浄土往生ができることされる。真言とは、真理を語った言葉という意味である。これを意識すると右のようになる。

し大明の掃命す、
 して徳の大印、
 菩提をよ、
 心する、
 なる宝日、
 転智珠と、
 ぜ能と蓮、
 しよ華と、
 めわれ光、
 よわら明、
 ら明なる、
 をの光照

一史散考全集(山川出版社)より



→キリーク
の異体……
板碑の主尊

は阿弥陀如来が多く、梵字キリークにも数種類の形状のものがある。

一十三仏……南北朝にはじまり室町
～江戸時代に追善供養の本体として
盛行した十三仏は、密教で普遍的に
信仰された諸尊を集約する。

ン	オン	敬礼
ヲ	ア	本不生
ヒ	ビ	
ラ	ラ	
ン	ウン	大誓願
ン	ケン	虚空無相
川		

←胎蔵界真言……胎蔵界は理の世界であり、その中心本尊胎蔵界大日如来に付される真言である。それぞれを意識すれば左のようになる。「本不生を証せる如来（胎蔵界）に帰命し奉る大誓願」という意味。

大日如来 (胎蔵界)	アーンク
不動明王	釈迦如来
文殊菩薩	普賢菩薩
地蔵菩薩	弥勒菩薩
阿彌陀如来	観世音菩薩
虚空蔵菩薩	勢至菩薩
阿闍如来	阿彌陀如来
虚空蔵菩薩	虚空蔵菩薩

→石塔にきざまれる梵字……右は庚申塔に刻まれる例。

アーンク	カン	ウン	ウン	ホロン	シヤ	ア	カ
大日如来	不動明王	青面金剛	大請願	諸仏一切結合	月天子	日子	地藏

右図の左は四天王、右は金剛界五仏。金剛界五仏における諸仏の配置を梵字で示したもので、大日如来は書かれていなくても、塔身の中央部を大日如来と見たてるわけである。

広目天	多聞天
ビー	ベイ
增長天	持国天
ビ	チリ

西阿彌陀如来	キリーク	ア北
大日如来	大日如来	不空成就如来
タラーク	東阿闍如来	
南宝生如来	ウ	

三開山塔

国指定重要文化財

この開山塔は、慈光寺を開いた釈道忠のために建てられた木製の宝塔である。建築様式からみて室町時代初期のものといわれている。創建後、天文二十五年（一五五六）に露盤を改修したことが、当山九十六世信海の雜記にあり、また棟札の写しが現存している。

慈光寺大塔開山塔也武州天台別院慈光寺開山塔造營并奉鑄升形
天文廿五年丙辰二月六日

西蔵坊 大工小韓仕廻 松木日逐助 (棟札写)

塔は、自然石を積みあげた基礎の上に建つ二重の宝塔で、高さ五・一メートル、一階の直径一・六メートル、二階の直径〇・六七メートル、屋根はとちぎぎ、上層は放射状に四手先の斗と供（ます組み）を配し、軒は二重繁樺となっている。このような建築様式をもつ木造宝塔は全国に類例がなく、貴重なものとして国指定重要文化財となっている。



開山塔

昭和三十九年に文化庁の指導により三百万円の工費をかけ解体修理が行われた。基礎下を発掘調査したところ、基壇石の周辺から経文を墨書し

た平たい小石

(一石一字

経)、鋳銅製の

風鐸、宝珠、

火焰、扉金具、

軒金具などが

出土した。こ

れらは現在の

宝塔以前に同

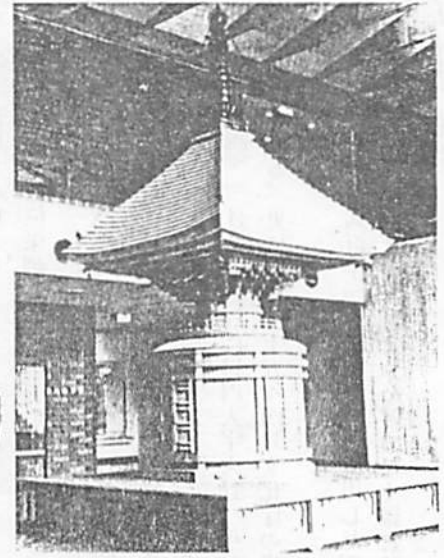
型の塔があり、その装飾

金具であったことが考えられる。さら

に下層一・五メートルの所から一軀分

の焼骨が納められた大型の蔵骨器が発

見された。(蔵骨器は国指定文化財)



復元開山塔 (埼玉県立博物館)



開山塔基壇下より出土蔵骨器

当寺開山釈道忠は、奈良時代東大寺戒壇院を開いた唐僧鑑真和尚の高弟である。「本朝高僧伝」によれば、東国の導師として各分寺を中心として関東諸国を徳化し、徳望高く民衆から広恵菩薩と仰がれていた。「元亨釈書」には、比叡山延暦寺の第二代座主円澄は、十八歳のとき、釈道忠に師事して修業、延暦十七年(七九八)三十七歳比叡山に登り、最澄の弟子になっている。円澄は比叡山に登る前に釈道忠のもと、慈光寺で修行したと推定される。さらに円澄に継ぎ第三代座主円仁(慈覚大師)も釈道忠の弟子と伝えられている。多くの名僧を育成し、当時持戒第一の人と称された釈道忠の廟所がこの開山塔である。

七 寛元の銅鐘

国指定重要文化財

当寺第八十九世榮朝は塔頭、拈華山靈山院創建の後、上野国世良田の長楽寺に移ったが、晩年の寛元三年（一二四五）願主となって銅鐘を奉納した。鑄造したのは鎌倉の名工物部重光で国指定重要文化財になっている。

高さ一四八センチメートル、口径八八・四センチメートルで銘文は次のように陽鑄されている。



寛元三年銅鐘の鐘楼



寛元三年銅鐘銘

奉治鑄 六尺推鐘一口

天台別院慈光寺

大勅進遍照金剛深慶

善知識入唐沙門妙空

大工物部重光

寛元三年乙五月十八日辛亥

願主権律師法橋上人位榮朝

大工物部重光は、関東鑄物師の棟梁といわれ、寛元三年より十年後の建長七年には「大和権守」の称号をもち鎌倉市建長寺の鐘（国宝）を鑄造し、また鎌倉市高德院の有名な露坐の大仏を鑄造した名工である。鐘楼は寛保四年（一七四四）三月二十四日に村内大字大野、小林長四郎重本が改築したものである。更に昭和四十五年四月文化庁の指導により修理している。

なお銘文のある裏側に「銅壹千貳百斤」と陽鑄して、使用した銅の量が記され他に例がなく、様式形態など美術史上だけでなく鎌倉時代史上極めて貴重な遺品である。

十一 紙本墨書大般若經

国指定重要文化財

印刷技術未発達の時代にあっては書写により文書は伝播した。奈良時代仏教の興隆にともない、国家機関の内に写経所が設けられたほどである。大般若経は一切経の首位の仏典であると尊崇され、後世に至るまで願経としてその写経は盛んに行われている。

当寺所蔵の紙本墨書大般若経は、貞観十三年（八七二）に上野国楡木郡安部朝臣小水磨呂が奉納した旨の奥書があり、関東地方最古の写経である。

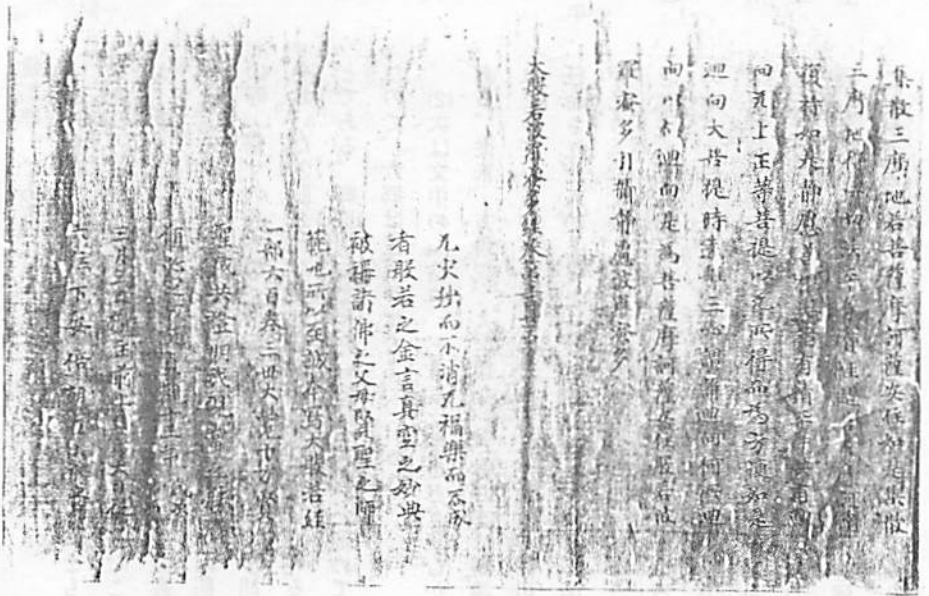
経巻の用紙（深椽紙）はトチの木を原料とし、黄褐色で縦二四・五センチメートル、幅五五センチメートル、一行の文字数十七字で、三十六行からなる経文が奈良時代様の格調高い書風で墨書されている。巻数は本来六百巻からなるものであるが中世の戦乱で失い、それに寺が破弊した時期もあって護符として分かち与える等散逸し現存するのは百五十二巻である。

この経巻は前掲の寛元の銅鐘と共に明治三十九年に国宝に指定されているので散逸したのはその年以前と考えられる。散逸した経巻については旧家の上蔵に家の護符として大切に保管されている。その他各地に慈光寺経といわれるものが越生町の法恩寺、吉見町の息障院、小川町の八幡神社、宮内庁図書寮などに完全な形で保存されていると伝えられている。またこの経巻は別名「羊の大般若」と称されている。

この頃ようやく全国各地で活発に行われはじめた一切経や大般若経の写経活動の、関東における数少い具体的事例として貴重な資料的価値を持つものといつてよい。

檀主の安倍朝臣小水磨の出自、経歴は不明だが、当時の地方では高位に位置する従六位下の位を持ち、前上野国（権）大目という国司の列に属していたことからすると、この頃の上野地方における有力豪族層の一人であったと見なされる。試みに、文献史料を徴してみると奈良末から

この貞観年間頃にかけて安倍朝臣姓を名乗る人物が度々上野国司に任じられている事実が判明する。すなわち天平勝宝四年の上野介阿部朝臣息道（正倉院黄絶墨書）、弘仁六年の左馬頭兼上野守安倍朝臣雄麻呂（日本後紀）、貞観七年の上野介安倍朝臣貞行（三代実録）等がそれで、このことから推せば、小水磨は彼等の一族として、早くから同地方に勢力を養っていた人物と想定される。



集散三所地若昔昔河渡安任...

二月七日...

領村如先...

四九上正...

迎向大母...

向以...

深安多引...

大般若...

九火掛...

有般若之...

被稱...

能也...

一部六百...

聖教...

三月...

六月...

多胡碑と渡来文化

多胡碑をめぐると
多胡碑をめぐると
多胡碑をめぐると

立派な覆屋の中に建っている。下野国の那須国造
陸奥国の多賀城碑と共に日本三碑の一つにかぞ

えられている。また山ノ上碑、金井沢碑等と上野三碑の一つとしても著明である。全国的にも七例ほどしかない、七・八世紀の古碑文のうち三基もが、鑄川と鳥川の合流点に近い地域に集中していることに注目を要する。

多胡碑は高さ一・二八、幅六〇の方形柱型の砂岩（産出地は南方のいわゆる多胡嶺の一つである牛伏山から切出されたもので、天引石とも呼ぶ）で、上に笠石をのせている。正面には六行八〇文字が薬研彫りで六朝風の力あふれる書体で彫られている。

全文は次のとおりである。

弁官符上野国片岡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊



碑文は和銅四年（七
一一）三月に、上野
国の片岡郡・緑野郡・
甘楽郡の三郡の内か
ら三百戸をさいて郡

とし、羊に給して多胡郡をつくったという。「多胡郡建郡碑」である。

この金石文は歴史的にみてさまざまな意義をもっている。(1)三郡から三百戸をさいて一郡にしたことは、『続日本紀』和銅四年三月の条に、甘良郡織裳、韓級、矢田、大家の四郷、緑野郡の武美、片岡郡の山等（奈）の各一郷、合わせて六郷をさいて多胡郡をおいたと記された文献記事と全く一致していることである。郷里制により、一郷は五〇戸と定めていたので、六郷は三百戸になる。

(2)次は文中の「給羊」とある文字をどう読むかである。従来、方角説、人名説などさまざまに議論されてきているが、新羅系の渡来人で、新設の郡司に任命された人であると一般に理解されている。国分寺瓦の「羊」や、近くの黒熊出土の瓦に「羊子三」と刻された文字瓦の出土していること、七興山古墳の羊さま伝説などを総合しての所論である。なお、天平神護二年（七六六）、多胡郡の新羅人子午足ら一九三人に吉井連の姓を賜わったという続日本紀の記録も、こうした渡来人集団の活躍、勢力の程を伺うことができる。

(以下略)

十二 一品法華經 (慈光寺經)

国宝

埼玉県には当寺の裝飾經である一品法華經と稱荷山古墳出土辛亥銘鉄劍の二点が国宝である。文永七年(一二七〇)の「二品經書写次第」と書かれた写經者目録によると、後鳥羽天皇、中宮宜秋門院任子を始め関白太政大臣藤原兼実の一門、門跡、公家を結縁者として三十二名によって書写奉納されたものであることがわかる。

叡島神社の平家納經、静岡の久能寺經とともに、日本三大裝飾經の一つに数えられ慈光寺經の名称で呼ばれている逸品である。全三十二卷、筆者目録一卷と寛政二年(一七九〇)の補写目録一卷が保存されている。

各巻のとびらには、金銀泥、群青、胡粉、野毛などを散らした極彩色の山水画、閑中に人物を紺紙に金泥で描き山水を背景にしたもの、人記品第九のように土佐絵庭園等が描かれている。料紙は金銀で霞、雲、波、御所車等を配し、天地に蓮弁、唐草その他の模様をつけ、經文の行間には截金の技法が施され、文字は金泥、銀泥で書かれている。この一品法華經は、平安時代の美術の粹を伝える貴重なものであるが、中世戦乱などで全三十二巻中六巻が散逸した。寛政二年、享和元年に白河栗翁(松平定信)修復の施主となり伏見宮妹君ほか五名の方により、補写奉納されている。

法華經は平安時代から鎌倉時代にかけて熱烈な信仰をあつめ、天台宗ではこの經の書写が一つの儀式にさえなっている。その起源に次の説話が伝承されている。

慈覚大師円仁は四十歳の時、死病にとりつかれた。師は一切の任を離れ日夜法華經の書写供養に没頭した。ある日、夢中に天の声があり、瓜に似た果物が与えられた。師はそれを押し頂いて食されると、それは蜜のように甘く美味であり、夢から覚めた後も芳香が口中に残って

消えなかった。この日を境として師の病はたちまち快癒したという。この故事によって、天台宗では法華經の写經を大切にしているのだといわれている。

一品法華經がなぜ当寺に奉納されたか由緒は明らかでない。鎌倉時代初期の当寺は、源頼朝、御台政子、比企能員、畠山重忠等の有力武将の信仰があつく、一山七十五坊をもって全盛を極め、さらに後鳥羽天皇から勅号を賜った榮朝禪師が在住するなどあって、政争の渦中の京都をさげ東国の名刹に奉納されたものと推測されている。奉納年代については、宜秋門院の院号が定められた時期や藤原兼実一門の衰運などから推して、目録の年代より約六・七十年さかのほるものと推定されている。



一品法華經人記品第九

慈光寺経一覽表

品種	品名	目録書写名	原本	江戶補写体 (寛政二筆)	同上書写名
1	序品	御所	○		
2	方便品	五条大納言	散失	○	伏見那頼親王の 妹君田鶴宮
3	譬喻品	仁和寺法印	○		
4	信解品	宜秋門院	○		
5	業草喻品	别当僧正	散失	○	前大覚寺 大業心院
6	授記品	妙高院僧正	○		
7	化城喻品	禪林寺法印	○		
8	五百弟子品	左大臣	○		
9	人記品	法性寺大納言	○		
10	法伽品	禪林寺法印	○		
11	宝塔品	十楽院僧正	○		
12	提婆品	吉祥御前	○		
13	勅持品	如意御前	○		
14	安楽行品	大原僧正	散失	○	徳川中納言宗武 卿の女
15	涌出品	太政入道	○		
16	寿量品	二位殿	○		
17	分別功德品	法性寺殿	○	○	近衛右大臣 経一位経照公
18	随喜功德品	法性寺法印	○		
19	法師功德品	九条殿	○		
20	不輕品	持明院大納言	○		
21	神力品	東光院法印	○		

22	囀果品	春日殿	○		
23	業王品	菅殿	○		
24	妙音品	嵯峨入道	散失	○	徳川中納言宗武 卿の女
25	観音品	東御方	○		
26	陀羅尼品	大原法師	○		
27	敕王品	おとど	○		
28	勅発品	幸御前	○	原本△ 下四行現存○	伊予州松山侍従 源定因
	観音賢経	宝寿院宮	○		
	無量義経	芝上僧都	○		
	阿弥陀経	姫君	○		
	般若心経	堀川大納言	○		

十三 木造宝冠阿弥陀如来坐像

埼玉県指定文化財

参道五丁目の急坂を登りつめた西脇に霊園造成工事をした平坦地がある。ここが旧浄土院跡である。

比叡山延暦寺第三代座主となった慈覚大師円仁は承和五年(八三八)請益僧として入唐し、浙江天台山国清寺におもむき修学を希望したが唐の行政の許可するところとならず、やむなく山西五台山の天台教学の聖地に至りここで常行三昧を修した。帰国後五台山般若道場にならって比叡山内に常行堂を建て、その本尊として宝冠阿弥陀如来坐像を安置した。当山の浄土院においても先例にならって宝冠阿弥陀如来像を安置し念仏常行三昧が修行されたものであろう。浄土院は大正年間に廃院となり後慈光寺に移された。

宝冠阿弥陀像は阿弥陀の異形の一つで、頭上に宝冠をいただき、宝

髻を結び上げ、結跏趺坐し手は定印に結び、体には通肩に袈裟をまわっているのが特徴である。

松材の寄木造り、玉眼で現在宝冠宝髻は欠失し、更に後世の補修が加えられているが、鎌倉時代後半の特徴を持つ制作である。

宝冠阿弥陀像は全国的に作例の少ない仏像である。当寺が天台宗の関東別院として比叡山延暦寺の規範にのっとろうとした証左の一例とも考えられる。県下では唯一の作例である。



木造 宝冠阿弥陀如来坐像

十四 木造聖僧文殊菩薩坐像

埼玉県指定文化財

文殊菩薩は「けがれのない仏の知恵を表わす菩薩」で古来より学業

成就守護のためにまつられ信仰を集めている。慈光寺においても多くの修行僧が在住した学寮の本尊として安置された僧形文殊菩薩は、長い間多くの人達にあつく信仰された。

聖僧文殊坐像は、松材寄木造り、木眼嵌入である。これは当初の玉眼が失われ後世補修されたものと考えられる。像高九三・六センチメートル、右手は第一指と三指四指をかるくあわせて前方に出し、左手は膝の上におき第三、四指をかるく曲げる。法衣の上に袈裟をかけている。文殊菩薩は通常普賢菩薩と共に釈迦如来の脇侍として配されているが、この像のように単独で僧形として造像されているのは、大きさ及びできばえ共に県下に他の作例をみないものである。

胎内銘文

像内胸前部に左の墨書造立銘がある。

慈光寺

聖僧大聖文殊

永仁三年丙申十月□

仏師 光 慶

大勸進僧

胎内銘文で明らかかなように制作者は仏師光慶であり、年代は永仁三年（一二九五）であることがわかる。大柄で迫力のある面相と大胆な刀の入りの深い衣褶のさばきは鎌倉時代後期彫刻の典型である貴重な仏像である。

受験期が近づくとき文殊菩薩を安置する各地寺院に合格祈願に参詣することが流行している。何はともあれ神仏にぬかづき、いつとき心の安らぎを得ることはよいことである。慈光寺に古来より修行僧をはじめ多くの人たちに信仰され今日に至る、文殊菩薩の安置されていることを知らない村民も多いのではないだろうか。親子共々拝観参詣されることをお勧めします。

十 金銅密教法具

国指定重要文化財

密教がわが国に伝えられたのは奈良時代である。更に平安時代初期最澄、空海の入唐によって将来されてより次第に盛んとなった。その密教修行事に独特の法具が使われ普及することとなった。

当寺の金銅密教法具は鎌倉時代に造られ、当時の特色をよく表わした金工品である。法具の内容は「花瓶」(花びん) 四個「独鈷杵」(古代インドの武器、すべてを破砕する力があることから、人の一切の迷いや悩みを打ち破る如来の力を象徴する) 一個「三鈷杵」(両端が三つに分かれ、我、仏、衆生を表わす) 一個「五鈷杵」(両端が五つに分かれ五智如来を意味する) 一個「塔鈴」一個「三鈷鈴」一個「宝珠鈴」一個(鈴はいずれも木尊を呼び迎えるための法具である) 「宝宝」一個「羯磨」四個である。

花瓶には「徳治二年」(一三〇七)の年紀と「大懸」という名前および花押が陰刻されている。様式、形態、文様などすべてにわたってすぐれ、本県では最古の作例であり、特に銘のあるのは全国でも珍しい。当寺は役小角に始まる山岳修験に属し、更に円仁(比叡山延暦寺第三代座主慈覚大師)が密教の道場として宝樹坊(明治時代に廃寺となる)を創建したことなど、密教の盛行によりこのようなすぐれた法具が所蔵されたものと推測される。



金銅密教法具

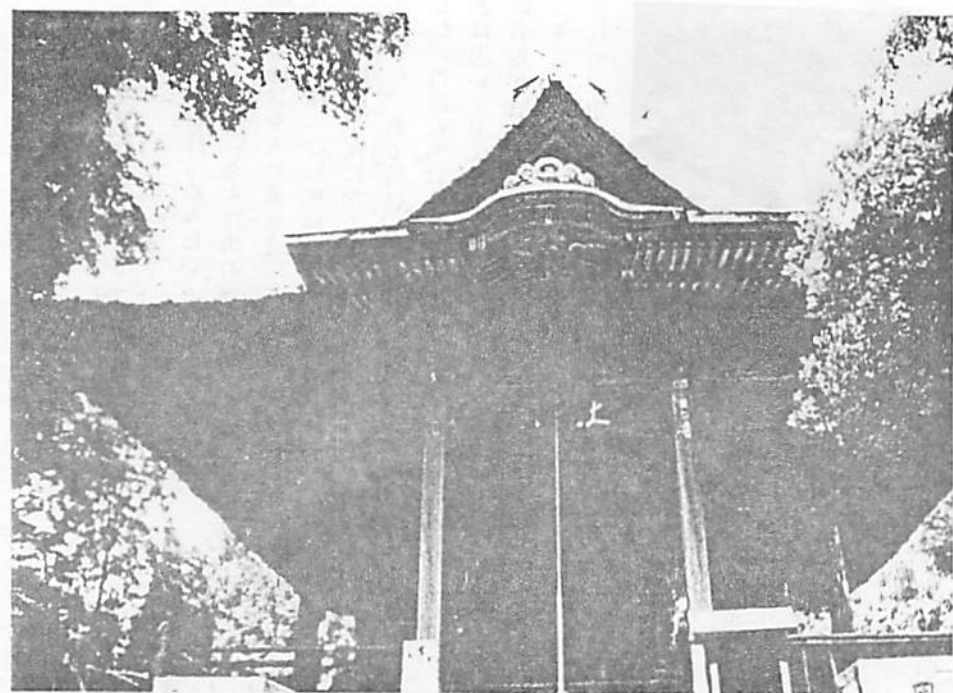
十九 坂東三十三観音霊場第九番札所の観音堂

本坊から西へ約一五〇メートルほどの坂道を登ること五分くらいのところ、坂東観音霊場第九番の札所観音堂がある。ここからのながめはすばらしい。南は目のあたりに重層する奥武蔵の山波が続き、東方にのみ開かれた山合いから、遠く東京周辺まで一望することができる。空気の澄む晩秋から冬季にかけては特に眺望が開ける。

往古の観音堂は現在地より五〇メートル程下がった所の「ふる観音」と呼ばれる場所が旧位置と伝えられている。寺伝に文化六年(一八〇九)十一月、観音堂炎上の記録があり現在の建物は文化七・八年頃の建立と推定されている。

創建の由来については前述の「都幾山慈光寺の概要」と一部重複するが、慈光寺実録によれば「人王四十四代天武天皇白鳳二年癸酉慈訓和尚當山に登り明星を礼す。常に紫雲飄舞として光輝ある所尋ね見れば、一人の翁あらわれ汝を待つこと久し、則ちこの山を汝に与うべしといへ、今に此所を与地の峯という。また、山常に光明あるを人呼びて慈光という。また、ある時、白衣の翁来りて千手観音の像を刻し慈訓和尚に授く、慈訓何人ぞと問いければ、我は是れ春日という。たちまち形を見ず。依って今に至りて此の本尊を春日の作という」

以後慈訓は千手観音像を本尊とし、観音堂を創建したと伝えている。寺伝によれば、慈訓は後に奈良時代仏教界の重鎮として活躍し、奈良興福寺初代の別当となり宝龜八年(七七七)円寂したという。観音堂は見上げるように高く、大きな茅葺の堂宇で、本尊の千手観音菩薩像は内陣お厨子内に安置され、像高二六・八・五センチメートル、寄木作り、彫眼で漆箔が施されている。お前立ちも優れた千手観音菩薩像である。この本尊は鎌倉時代の様式であるが制作は南北朝時代に



坂東九番 観音堂

下ると推定されている。
 本尊厨子の右奥に安置されている十一面観音像は畠山重忠の念持仏と称され、一木作り、彫眼、像高一八〇・一センチメートル、重忠の



木造 千手観音菩薩立像



木造 十一面観音菩薩立像

身長と同じに制作されたと伝えられている像である。
 外陣の upper 段に算額が掲げられている。文政十三年庚寅（一八三〇）市川行英門入田中与八郎、馬場与右衛門、久保善八郎の奉納したもので、和算研究者の熟知しているところである。また、左上に伝左甚五郎作の馬の彫刻物がつるされている。「夜荒しの名馬」と呼ばれ、これにまつわる伝説が残されている。

なお、本尊千手観世音菩薩像は秘仏で、毎年四月十七日御開帳日以外は厨子の扉は閉ざされている。御開帳の当日は多くの信者が登山し、盛大に護摩法要が行われる。近年特に全国各地からバスを利用しての巡礼者が多く見られる。

坂東九番札所 巡礼歌

たのもしや慈光の山に登りきて
 そのあかつきのえにしむすべ

二十 伝説 夜荒しの名馬

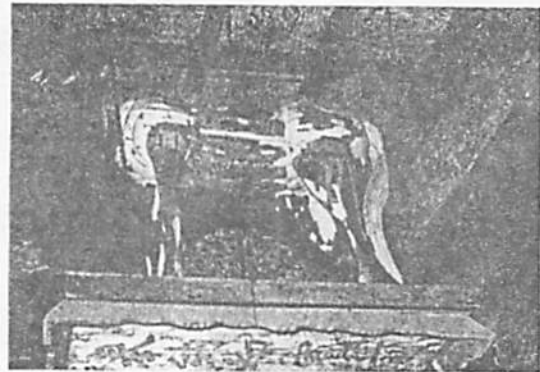
左甚五郎の持つのみはいきおいよく彫り進み、二日三日と過ぎて行くうちに、太い丸木は馬の頭になり足になり尾になって行きました。甚五郎は目を入れるとき、ふとあらあらしい気持ちになりました。甚五郎は「この馬は、少し気があらいようだ」とつぶやきました。

この馬は、夜になるとそつとぬけだして、付近の畑の作物を荒し回りました。ある時は、二里も三里も遠方まで駆けて行くこともありました。百姓たちは不思議に思いましたが、まさか、この名馬のしわざとは思いませんでした。しかし、いく日かするとだれ言うとなく、あの名馬が夜になると姿をあらわすと言いました。

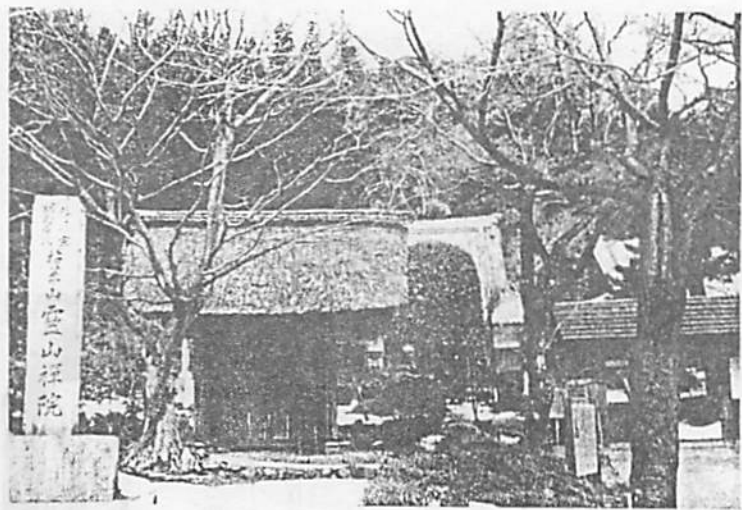
そこで、百姓たちは相談して、夜になるのを待って二・三人ずつが分れて、思い思いの方面に行つてかくれていました。名馬はそれとはしらずに、その夜ものそりのそりとやって来ました。

「やっ——、たしかにあの馬だ。しかし不思議なことだ……。」

百姓たちはあつけにとられました。こうしたことが、いくたびも続きましたので、百姓たちも怒って、その尾を切ったり、鉄鎖で口元をしかりしばったりして、観音堂の上に納めてしましました。



木造 夜荒しの名馬



拈華山靈山院

二十一 拈華山靈山院の概要

当院は天台別院都幾山慈光寺の塔頭として鎌倉時代建久八年(一一九七)宋より臨済宗黄龍派を伝えた明庵榮西禪師の高弟猊円榮朝禪師によって創建された。後鳥羽天皇より「東関最初禪窟」の勅額を下賜され、関東で最初の禪修行道場と伝えられている。

榮朝禪師は後に上野国(群馬県)世良田の長楽寺に移られ大いに禪風を挙げられた。門下からは東福円爾、神子榮尊、無本覚心、蔵叟朗

25

等等多くの名僧が輩出している。

靈山院御開山榮朝禪師行録に、聖一國師が禪師の行績を讃嘆した唱文が掲載されている。

円爾（聖一國師）唱文 建長元己酉正月（一二四九年）

榮朝禪師示寂の翌々年にあたる）

勅賜 榮朝禪師

胸懐俊逸、氣宇寛柔、曾在台嶺窟中、専修密乘、更入虚

庵室内、直得心牛、遊慈光精舍適上皇聖旨、草拈華道場、

振乃祖宗猷、夕弄真如実相智月、朝救衆生煩惱苦海、晦

迹霜光中寓石上為道人示妙蜜、和光同塵、再坐浮木為明

君說機芳刺鼓法絃、排斥鴛鴦群類、更發神語庄倒寂山衆

流、曲々令人為欣歎、洒々落々、聲々、使人解鬱悶、侃々

悠悠、五十年打成一片、九十余歲此罷休

当院は明治五年政府の布令により京都花園臨濟宗妙心寺派の所轄となり現在に至っている。現在の建造物は昭和四十六年、勅使門、本堂、庫裡とともに寺有林材を使って旧結構にのっとり復原改築されたものである。末寺六か寺、村内西平地区小川町大河、古寺地区に多くの檀信徒をようする名刹である。

主な文化財

五色の仏子

インスの香炉

木造開山榮朝禪師像

鉄造阿彌陀如来坐像

永仁の板石塔婆

葛絵の硯箱

室町時代 像高 四九センチメートル

鎌倉時代 像高三・四・一センチメートル

鎌倉時代 永仁四年銘

徳川五代将軍綱吉公より拝領

榮朝禪師が入宋、虚庵懷散禪師に参じ印証とともに拝領

〃

室町時代 像高 四九センチメートル

鎌倉時代 像高三・四・一センチメートル

鎌倉時代 永仁四年銘

徳川五代将軍綱吉公より拝領

二十二 永仁の板石塔婆

埼玉県指定文化財

永仁四年（一二九六）銘があり鎌倉時代の様式を代表する板石塔婆として昭和十六年国重要美術品に認定され、現在埼玉県指定文化財となっている。塔高二〇二センチメートル、塔頂部三角形、横二線の切り込み深く、塔身の幅上部は狭く下部を広くして均整をとり安定感がある。種子の阿闍如来（ウーリン）を格調ある深い葉彫りの荘厳体で刻み、蓮台は中央の花弁が大きくふくらみ、左右花弁の緊密重厚な集合相等は鎌倉期の特色をよく表しているものである。左右二行割りに梵字で大随求小呪が配され、銘文は「為造立浮図并干部妙経生々父母法界 永仁三季丙申二月日」 碑両側面に造立者とみられる「現住四世雲峯」とある。造形、種子、銘文共に鎌倉時代を代表する優れた貴重な遺品である。

この永仁の板碑は種子真言願文等から天台と密教の複合を証左するものとしてよく例示される。それは種子阿闍如来は密教の金剛界の五仏の一つで東方に位置し、不動金剛を密号とする重要な如来である。大随求小呪は光明真言とともに民衆に会衆尊重されたものであり、さらに天台宗の主要經典である法華経千部を誦誦し、父母の追善供養とすることが願文によって知ることができる。



永仁四年板石塔婆

鉄仏

東国の中世彫刻を特色づけるもの。鑄型に鉄を流しこんで造る仏像で、この時代になって、にわか出現した、新しい素材の仏像といえる。鎌倉時代から室町時代にかけて、主に関東を中心とする東日本の各地に流行したが、その多くは在地の有力武士や勲進聖などを主体とする地域的な信仰活動を背景に造立されたものらしく、生産や戦闘で慣れ親しんだ鉄の持つ金剛不壊な堅牢性への期待や当時のめざましい鑄鉄技術の発達などが、その理由に考えられる。(図説・日本文化の歴史⑤鎌倉 小学館 54年刊)



鉄造 阿弥陀如来坐像

関連年表

788	延暦 7	最澄	比叡山に一乗止観院(後の延暦寺)を建つ
805	延暦 24	最澄	天台宗を創む
858~876		清和天皇	在位
871	貞観 13	安部小水麻呂経	書写奉納
1180	治承 4	源頼朝	挙兵 石橋山の戦
1189	文治 5	源頼朝	藤原泰衡追討
1199	正治 元	源頼朝	死す
1245	寛元 3	慈光寺	銅鐘
1247	寛元 5	行田市・天州寺・聖徳太子像	
1249	建長 元	越谷市・建長板碑	
1252	建長 4	鎌倉大仏	
1255	建長 7	鎌倉建長寺	銅鐘
1284	弘安 7	慈光寺	最古の板碑
		北条時宗	死す
1296	永仁 4	霊山院	板碑
1345	康永 4	慈光寺	十三仏板碑
1354	文和 3	越谷市・六字名号板碑	(大成町)
1355	文和 4	慈光寺	六十六部板碑
1358	延文 3	足利尊氏	死す

参考図書

- 永井路子対談集「鎌倉人物志」 毎日新聞社 昭54年刊
- 埼玉県古代寺院跡調査報告書 埼玉県史編さん室 82年刊
- ふるさとの寺 秋山喜久夫、敏蔭英三著 埼玉県郷土史料刊行会 昭46年刊
- 埼玉の仏教文化 埼玉県古文書館 昭59年刊
- 慈光寺 古彩会 昭60年刊
- 関東古社名刹の旅 千葉・埼玉・神奈川編 稲葉博著 読売新聞 昭61年刊
- 古代東国の薈 埼玉県立博物館 昭57年刊
- 埼玉県古代仏教遺品調査報告書 埼玉県民部県史編さん室 昭59年刊
- 探訪日本の古寺 関東・甲信越 鶴岡静夫・渋谷正男 宮 栄二著 小学館 昭56年刊
- 写真探訪ぐんま①歴史の散歩道 上毛新聞社 昭59年刊
- 都幾川村の史跡と文化財 都幾川村教委 昭58年刊
- 都幾川村の文化財 都幾川村教委刊
- 仏教語大辞典 中村 元著 東京書籍 昭56年刊
- 図説・日本文化の歴史⑤鎌倉 上横手雅敏他編 小学館 昭54年刊
- 歴史散歩事典 山川出版社 79年刊